

## 全インド貝葉及び古文書文献のセミナーを開催して

彦 坂 周

インドでは、中国や日本のように紙の製法があまり発達しなかったため、最近代に至るまで文書記録の素材としてはパームリーフ、即ち貝葉が広く用いられてきた。しかし、19世紀末から20世紀になって紙による印刷が普及すると、貝葉に記載するという伝統は急速に衰退していった。貝葉とは貝多羅葉の略語で、梵語 *pattra* あるいは *tala* 樹の葉に由来している。インドでは貝葉として *Palmyra-palm* (学名 *Borassus Flabellifer*) や *Talipot palm* (学名 *Corypha umbraculifera*) の葉が広く用いられているが、これら貝葉文献の寿命はインドの厳しい自然環境では約200～300年位といわれている。したがって現存する貝葉文献は少なくとも200～300年以内に一度は書写され受け継がれてきたものや、印刷の普及以前に書かれたものである。然るに紙の普及や印刷が一般化して貝葉に記載するという伝統が失われてしまった現在、これら世界人類の文化遺産ともいふべき現存する貝葉文献は虫害や自然破損および散逸などによって徐々に失われる状況にあるといえよう。

南インド・マドラスに本部をおくアジア文化研究所では、タミル州各地の大学や研究所に所蔵されているタミル文字で書かれた貝葉文献の調査および総目録の編纂事業を進めており、同時にタミル貝葉文献の英語対訳出版を行い、また貝葉文献を後世に受け継いでいくための人材育成も行っている。これら諸事業を進めていく中でも、雨漏りや虫害など保存状態が悪いためた、翌年同じ所を訪れると既に破損して読めないような状態になっているケースが多数生じている。またこのような貝葉文献の現状に鑑みて、現在、インド国内においてどのような文献がどこに、どれだけ収集保存されているのかについても、全インドを網羅した詳しい調査報告が行われていないことが明らかとなった。

そこで今回、アジア文化研究所と国立ポンディチェリー中央大学タミル学科の共催で、1995年1月11日～13日までの3日間に渡り、「全インド貝葉及び古文書文献に関するセミナー」を、ポンディチェリー大学において開催したので、その内容の概略をここに報告し、日本のインド学研究者の便に供することができれば

幸甚である。

セミナーでは、第一部、インド各地各言語の貝葉文献の収集保管状況について、第二部、化学薬品等による防虫駆除及び保存方法、さらに後世に貝葉文献をどのようにして継承させていくのかなどについて討議が行われた。この中、第一部での報告発表に重点が置かれ、インド各地の言語で書かれた貝葉文献について次のようなスケジュールで行われた。

1月11日、午前中開会式を行った後、午後2時より5時までに、1、オリッサ州のオーリヤ文字で書かれた貝葉文献について、2、パンジャブ州における貝葉文献について、3、ジャンム地方ラグナート寺院所蔵の貝葉文献について、4、ヒンディー語の貝葉文献について、の4名の報告が行われた。

1月12日午前、5、マラティ語における貝葉文献について、6、モディ文字で書かれた貝葉文献について、7、ベンガル文字の貝葉文献について、8、アッサミー文字で書かれた貝葉文献について、9、グジャラーティ文字の貝葉文献について、

12日午後、10、南インド四州に所蔵されているサンスクリット語の貝葉文献について、11、インド以外で所蔵されているサンスクリット語の貝葉文献について、12、北インド諸州に所蔵されているサンスクリット語の貝葉文献について、13、パーリ語の貝葉文献について、

1月13日午前、14、タミル語の貝葉文献について、15、タミル州以外のタミル貝葉文献について、16、カンナダ語及びカンナダ文字の貝葉文献について、17、マラーヤラム語及びマラーヤラム文字の貝葉文献について、18、テルグー語及びテルグー文字の貝葉文献について、19、他の文字で記されたトル語の貝葉文献について、

13日午後、20、ベンガリー、サンスクリット、グランタ、ネワーリ、オーリヤ、サラダの各文字で書かれた貝葉文献について、21、昔と現代の貝葉文献の保存処理技術について、22、最新技術による古文書の保存及び保存処理について、23、最新技術による貝葉文献の保存処理について。

以上、当セミナーで発表された23の報告書の内容を詳述することは別の機会に譲ることにして、ここでは特筆すべき要点のみに触れておきたい。

これまで、インドにおける諸言語で書かれた貝葉文献についての調査・研究は、ある特定地域や各州内および貝葉文献を所蔵する各図書館などで独自に行われてきたが、全インド的規模で調査報告がなされたのは、おそらく今回のセミナ

ーが初めての試みであろう。今回行われたセミナーでも南インドの学者は北インドの学者の調査・報告に対し、またその逆においても新たに知ることが多かったようである。例えば、南インド・タミルの王の娘が北インド・ジャンム地方の王妃として嫁いだため、婚礼道具と一緒にタミル語で書かれた多数の貝葉文献も持参され、現在でもそれらがジャンム地方のラグナータ寺院に保存されていたり、タミル州タンジャウールのサルフォージ王家はマハーラーシュトラ地方から来たため、タンジャウールのサラスヴァティ・マハール図書館には多数のマラティー語の貝葉文献が保存されている。

インドの北部、東部、中央部、西部においては貝葉への記載方法はインクをペンに付けて書かれているのが一般的であるのに対し、南インド四州の貝葉文献はそのほとんどが貝葉に先の尖った鉄筆で線刻し、そこに油と木炭を混ぜたものを塗り込んだ後、貝葉の表面を綿布などで拭き取って、線刻した文字のみを黒く浮き出させるという方法がとられている。しかし、南インド・マイソールにある Oriental Research Institute には、Dhavala 文献というカンナダ文字で書かれたブラークリット語の貝葉があり、これはペンにインクを付けて書かれたものである。カルナータカ州においては、12世紀頃から数世紀の間、Dhavala 文献に代表されるペン書きの貝葉記載方法が用いられたようであるが、それ以後の貝葉文献では他の南インド諸州のように全て鉄筆で線刻したものとなっている。その理由として K. シヴァラーマ・カラントはカルナータカ州は綿花の特産地で綿布などにもペン書きの記載方法が普及しており、ある一時期の間貝葉にも特殊インキを用いたペン書きが行われたが、特殊インキの製法は秘伝とされていたため、その秘伝が途絶えた後、gall-nut などの薬草を用いたインクで貝葉にペン書きされたが、特殊インキと違って薬草インキで書かれたものは短期間のうちにインキが変色消失してしまいうので、ペン書き記載方法は廃れてしまったのではないかと指摘している。

先にも述べたように貝葉文献の寿命は普通インドの厳しい気候条件では大体300年位といわれているが、K.T. Pandurangi によれば貝葉に書かれたデーヴァナーガリー文字のサンスクリット文献の最古のものは11世紀頃とされる。また、A.C. Burnell によれば現存する南インドの貝葉文献ではカンナダ語で書かれた1428年のものが最古であると報告されている。

今回のセミナーで明らかになったことの一つは、インド各地にはそれぞれの地方の言語とその地方の文字で書かれた貝葉と同時に、デーヴァナーガリー文字

で書かれた多数のサンスクリット語の貝葉があるが、サンスクリットの文献とはデーヴァナーガリー文字で書かれた文献だけではなく、その地方の文字で貝葉に書かれたサンスクリット文献も多数存在していることである。このことに関して、アドヤール・テオンソィカル・ライブラリーのDr.クンジュニ・ラージャは、サンスクリット文献の近代的研究は、近代になってヨーロッパの学者によって飛躍的に進められてきたが、そのとき以来、サンスクリット文献はデーヴァナーガリー文字で書かれたものであるという認識がなされ、それが欧米の学者に定着してしまっているが、古来インドにおいては、例えば、アーンドラ地方においてはテルグー文字で書かれたサンスクリット文献とか、ケーララ地方ではマラーラム文字で書かれたサンスクリット文献も多数存在するのである、と指摘している。

また、北インド・ジャンム地方の貝葉文献の報告では、ドグラ地方ではドグリ語が話されており、古くは *Namen Dogre (a form of Takri)* という固有の文字でドグリ語が記されていたが、後代になるとペルシャ文字やデーヴァナーガリー文字でドグリ語が記されるようになった、と報告がなされている。

さらに興味深いこととして、東インド・オリッサ地方では多数のサンスクリット文学がオーリヤ文字で書かれているのみではなく、隣接するベンガル地方の文学をベンガリー文字からオーリヤ文字に置き換えて書かれた貝葉も多数あり、また逆にオーリヤ文学をベンガリー文字に置き換えて書かれた貝葉も多数あることが報告されている。

すでに周知のことと思うが、インド各地にはそれぞれの言語と文字で書かれた叙事詩マハーバーラタやラーマーヤナが多数創作されており、貝葉文献として残っている。その他ヒンドゥー教の神話に関する物語、すなわちプラーナも各言語各文字で書かれた貝葉が多数ある。それゆえ、今後このようなインド各地の言語・文字で書かれた貝葉を基に、これらの言語や文字の研究とともに比較研究を進めていくことが期待される。

最後に、このような貴重な人類の世界的遺産ともいべき貝葉文献を、後世にどのように保存継承していくのかについての、報告および討議も行われた。貝葉文献やその他の古文書を後世に継承し研究していく方法としては、従来マイクロフィルムに撮って保存および研究に提供するという方法が行われてきたが、最近コンピューター技術の飛躍的発達と普及により、貝葉やその他の古文書文献を画像処理してコンピューターに入力し、フォトCDRomとして保存し文献研究にも提供していこうとする試みとして、今アジア文化研究所においてもその研究が

進められていることをここに報告しておきたい。

今回の「全インド貝葉文献その他の古文書文献に関するセミナー」では、インド各地に収集保存されている多種多様な言語・文字で書かれた貝葉・古文書の文献の現状についての貴重な報告がなされたが、最後に、日本ではこれまであまり紹介されていなかった、南インド四州に保存されているサンスクリットの貝葉文献について、それらの所在地の代表的なものを以下に列挙しておくことにしよう。

#### A. Andhra Pradesh

1. Srivenkateshvara University, Oriental Library, Tirupati..... 9, 150
2. Reshtriya Sanskrit Vidyapith, Tirupati ..... 4, 055
3. Andhra University Library, Waltair..... 2, 000
4. Sri Raghavendra Swami Mutt, Mantralaya, Kurnool Dist..... 1, 000
5. Warangal Historical Research Society, Hanumakond,  
Warangal ..... 40

#### B. Karnataka

6. Oriental Research Institute, Mysore .....45, 000
7. Danashala Mutt, Shastra Bhandara, Mudbidre ..... 2, 555
8. Sri Parimala Samshodhana Mandira, Nanjangud ..... 2, 000
9. Sir Uttaradi Mutt Granthalaya, Bangalore..... 1, 200
10. Maharaja Sanskrit College, Mysore..... 1, 600
11. Sir Uttaradi Mutt Granthalaya, Hospet, Bellary Dist ..... 1, 000
12. Sharada Bhavan, Bagalkot, Bijapur Dist..... 1, 000
13. Sir Sode Mutt, Sode..... 1, 000
14. Sanskrit College, Melkote, Mandya Dist ..... 850
15. Sir Moorusavira Mutt, Hibli..... 500
16. Sir Pejawara Mutt, Udupi..... 433
17. Carukirti Panditacarya Jain Bhandar, Sravanabelgola..... 407
18. Sir Krishnapur Mutt, Udupi..... 354
19. Sir Sivayogamandira, Badami Taluk, Bijapur Dist..... 300
20. Viravani Jain Siddhanta Bhavana, Mudbidre..... 300

#### C. Kerala

21. Kerala University Manuscript Library, Trivandrum.....35, 162

( 56 ) 全インド貝葉及び古文書文献のセミナーを開催して (彦坂)

22. Govt. Sanskrit College, Tripunithura.....	2,479
23. Sukriteendra Oriental Research Institute, Cochin.....	850
24. Tekka Matham, Trichur.....	360
25. Nadvil Mutt, Trichur .....	179
26. Brahmasva Mutt, Trichur.....	91
27. Pubric Library, Trivandrum.....	36

#### D. Pondicherry

28. French Institute of Indology, Pondicherry.....	12,709
--	--------

#### E. Tamil Nadu

29. Govt. Oriental Manuscript Library, University of Madras, Madras .....	31,412
30. Maharaja Sarfoji Sarasvati Mahal Library, Tanjore .....	30,377
31. The Adyar Library and Research Centre, Madras .....	20,000
32. East India House Manuscript Library of the Board of Examiners.....	1,249
33. Upanished Brahma Mutt .....	670
34. Kanchi Kamakoti Peetha Mutt, Kanchipuram .....	543
35. Rameshwaram Devasthanam Pathashala, Madrai .....	374
36. The Kuppaswamy Sastri Research Institute, Madras.....	244
37. Madrai Tamil Sangam, Madrai.....	129
38. Annamalai University Library, Annamalai Nagar .....	55
39. Ahobila Mutt Sanskrit College, Madhurantakam.....	53
40. Kallalagara Devasthanam Library, Madurai .....	53

〈キーワード〉 貝葉文献, インド諸言語, 南インドの梵語貝葉

(アジア文化研究所所長/教授, 哲学博士)